

27-73

特67 4901  
730

明治十六年六月發行

# 明窓

第一編

東京、橋区加賀町  
由之禮堂版

定價三十錢



興為魚

明治八笑人

米々	露七	鼻下	造	平	次	土	訥	能	樂	九	郎	雅	太	吉	頑	八	頑	八	助
----	----	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

明治八笑人 第一編序

垂清字膏

古人の語を假り、一首の歌を詠出して曰く、「世の中何の絲瓜の皮一片、むくりて筋をはるまでをなき」と、上古神代ハ、則知らば、節々の山へ採薪よ、媽媽ハ川へ浣衣に、出かけるといふ往昔でも、ぎんど降て八字髯の、おつよひねつと今日でも、變らぬものハ、人情にて、相約借老男女の、別離ハ悲焉、相約勿頸朋友の、會合ハ樂焉、然れど人生は、衣食住、ろれよ尙且色慾といふ、四種の刺衝物のあるゆゑに、左でもなけれバ、右でもない、名を取らふより利得を取れと、一事一言唯是利に、多くもあらぬ腦漿を、耗盡了するまでに、齷齪とて、おつよ、かぬと、泣くも怒るも恨むのも、皆

二  
是各自の自由の權、雖然世間が如斯では、余輩までも困るは當然、  
なんでも諸君よ笑はして、其門に来る福神を、悉皆我田へ引幕と、  
踵を鼻へ無稽の、噓語をうのまゝ筆書し、故人鯉丈が著せし、八笑  
人の名に擬して、明治八笑人と題したり、彼は往時の花曆、此は明  
治の新滑稽、拙き文の可笑も、時にとりての一興なるべし、江湖諸  
君請此書でも見て、嗟噫逼々世道かなと、酔いた胸襟をおつぴら  
ま、苦味虫とやらを咬破し、其顔容を廢し、まへと希ふにこそ、

明治十六年六月 著者識

明治八笑人第一編卷之上

竹の家の主人垂湧子 戯著

先づあげまして、おめでたう、蒲田よ梅花の開初より、上野の  
今日か飛鳥山、墨田堤上の櫻花時節、雲か雪か、しるたへの、  
衣着るてふ八朔や、音信を菊の花の宴、あれ見やしやんせ海  
晏寺、まよ龍田も、高雄でも、及ばぬ色の紅葉狩、四時をりを  
りの風流、足ど京城の繁華ならぬ、茲よ愛宕山東、竹芝浦よ  
米露七とて、獨居の男あり、往時の何家、某何とて、本坊邊よ住  
して、豊に生活せし者なるが、己が行状の放蕩ゆゑ、家道日増  
不如意と爲り、今の家屋宅地まで、賣却爲して、其財本を、某商

店に寄託、子金を以て衣食を爲し、優遊を業の怠惰漢、類の類  
 伴とや夕まぐれ、門戸の格子扇瓦落離と開け、ぬつと入るの  
 能樂九郎、サア、  
 長を訪へる、汝の能樂にあらざるか、と圍房の裏より聲  
 かけられ、「オヤ聲ばかりして姿が見えぬエな故よ人皆米  
 露公をぢぐつて屈の櫛と云ふのか米露七の圍房より出来  
 り、余が圍房に入て在たを幸に饒舌やしながらさがしご  
 とでもしわがッたらふ今日、諸氏の來やうが晚いちやぬ  
 エか、他諸氏の米露公と以後交際の否だと云てゐるがそれも  
 多々憫然だから余一個吊問に來たのさ、何だ吊問よ來たと

汝が屍色をしてゐるくせよ、此時戶外よ郵便々々復何者か  
 ヲ欺がふと思つても徒勞だ上堂々々郵便々々誰何か早く  
 入らぬエか、と紙障に候めたる硝子より外を覗いて戶外よ  
 行て在るの誰何エ、余だ何だ土次か汝一個で來たのか、雅  
 太公と同行二人だ、宜矣哉とトがたすると思つた、汝が方で  
 郵便と聞たもんだから、債主の討帳書信と覺てどぎまぎし  
 たが聞てあきれらア、と入りにかゝるを背後より「雅太さん  
 く、どしのがれ聲をかけられて雅太吉の應をも言はず黙  
 燈時分を僥倖よ暗に乗れて走り行く、雅太公の何で如彼よ  
 喫驚して遁逃したらふ、何サ此朴助殿下の威よ恐れて遁逃

したのサ、と雅太吉が遁げたる方に向ひ、いやに可笑な態を  
 作し「ヤア、く、それにおちさせたまふは、ん、ん、ん、の雅太吉  
 と見たてまつるイザ回歸して放尿々々、と前股をまくりて放  
 尿を爲さんとするよ、さきほどより密に舉措を物陰にて窺  
 ひ在たる鼻下造が「ク、ヤ、く、嘗ち街頭に放尿をするよ、ア、な  
 らんちゆふ規則のあるよ、放尿をするた、ア、何した事か」と云  
 ふを眞個の巡查と思ひ、此も同く逃げ出すを土太の傍から  
 袖を引、留め「朴さん、今汝に逃げられて見ね、エ、な、此處に在  
 た者が連累だ、人の放尿とした爲に拘引されちや、ア、意が利  
 か無いから汝一個を巡查さんよ送付して余輩が冤の罪を被

無い様よ爲なくツちやなら無い朴助の怯怖漢よ、て「土太さ  
 ん、萬望放免して、といふも僅是口裏喃喃々前よ逃げたる雅太  
 吉、此時分正回り來て斯くを見るより土太に向ひ「土太さ  
 ん、此處で左や右言て在たら足下までが叱られよ、ふせ「彼奴  
 も此奴も多々意地の悪い事をしろよ、警察署よ行くのが嫌  
 い、だ、故汝等に依頼つて在るんだ、もう如斯なりや意を決め  
 た、一夜拘留られた以上が科料金を出しせへすりや好了だ、  
 サア送付すとも如何ともしろ、雅太公足下の復仇も既其で  
 満足だらふと云ふ、正鼻下造の言聲と知て朴助「エ、  
 いめへまじい巡查だと思つたの、此鼻下長か「ッ、ア、く、  
 一

同米露七奴が草堂へ入りて暫時休憩あれ、いかに米露七、如  
 斯暮れ果てたる今時分まで、點燈の準備を爲さるるの敵を  
 欺く計略なるか、汝等ごときが軍略は争陥る余ならんや、と  
 曰へど應答のなきま、よ上りて徐々室に入れど人音さへ  
 もあらざれば、さつき余等の來た時よ在たのだから何處に  
 も行たのぢやなからふが燈火も點けぬへどの如何した者  
 だのう、とにかく隣枝を探すとしよふと、厨房へ行く土次が  
 眼前にきらめく秋水を突きつけられ、見れば一個の大漢手  
 帕を以て面を包み、發聲させじと其腕を伸べし、手早く土次  
 を捕て扯住聲を潜めて、ヤイ戰慄するにやア及ばぬへ余の

則ち強盜公だが、過刻汝等が家の前で、喧噪惡戯彼の間よ入  
 れば此家の主人らしい奴が、逃げ出さふとする故扯住める  
 と今回ハ聲を發さうにしたので、殘忍ながらも手よかけて  
 殺害して了つた死屍ハ此だと手を取られ探らせられて魂  
 を消しキヤツと一聲叫んだま、打倒れたる物音よ、一同喫  
 驚起ち動げど、暗黒ハ則暗黒燈火はなし、唯周章限あし、夫の  
 盜兒に扮ちしも死屍よ擬せしも土次公が眩暈絶倒したる  
 よ仰天し一個ハ倒れし土次を呼び、土次公ヤアイくく  
 一同も早く來て下つし、能樂公燈火を早く點けぬへか、水で  
 も一錠飲まして見よふと呼び甦るやら水を灑くやら青く

爲ての看護を、傍の數個人も助けしよど、方纔呼吸を吹き回  
 し土次の四邊を回視して、ものをも言はず惘然と、失氣の狀  
 「畢竟如何した事由だ」エ「なにサ日没時分土次公と雅太公が  
 遞信夫の假聲で余を欺がふとした故何か復仇をしてやら  
 ふと種々かんげへたが、兩個の元來死屍ざらひ、死だと見せ  
 て消魂させるが、捷徑だと思ひ着たところから能樂公の來  
 て在たのを幸強盜兒よ形を扮出させ、其傍に自家が害殺さ  
 れて倒れて在て日が晩れても燈火を點けずにおく處が計  
 略さ、然すれば焔兒がないヤレ燐枝も無へといふ處から厨  
 房へ來るに、違筭無へと網罟張て待とも知らず輕躁に飛

び出して、バツサリ鳥罟に罹つたの、めざす敵手の一個と  
 名詮自稱も陳腐めかしいが、其名も恰好土次な奴よ「雅太公  
 足下も危く如彼難に遭ふ處だ、小生その場にたち會ひ、目  
 に物見せて何後を、キツト戒め申さんものを、在あわせざり  
 し、遺憾至極、此より直さま其場へ赴き、土次が怨を晴らさ  
 せん」小生その場にたち入らば、目も物見するまゝ、ふるくし  
 キヤット聲たて申さんが聞てあきれらア「さつき戸外で余  
 よ喚かれて奔竄したの、雅太公如何いふ事由だ、いわれか  
 あれの斯いふ事由だ」そらいふ事由「如何したもんだ能樂  
 公」斯いたもんだ米露公「エ、そういふ事、どういふ男だ、雅太公實に



何故逃げたのだ。正諸君よ開かれちやア面目ねへが實の横坊の鹹味せんべい店の媽々に十二錢負債がわッて數々討帳されるので頃若可及的會のねへやうに避てるが朴助に聲をかけられたのを正に媽々に看肴かつたと思ツたから此ア危険と思ツて逃げたのよヤレ。膽力のなさかげんが甚い膽力どころか色氣がなへア。ア。ア。ア。朴助なんども喋々人の長短が言へた義理でもあるめエ世鼻下公を巡查と誤認へて戰々として在たぢやアねへか。此時戶外より誰か在此か。サア品川へ行ッちまへ。然でなけア何か食のせろ。オヤ大變な奴が舞ひこんだ。めづらしや訥平、此處で會ツたハ天の

賚賜、後刻とも曰はず眼前で、現在錢子悉皆まくじり出し、それで牛肉でも裂ッて了へ、訥平の堂へ上り「オヤ大へんよ集ツたぢやアねへか」訥平の來てゐるか。頭八かオット入ッちまへ。「コレハ」好くマア情婦の出來ねへ人物耳合同ツたせ。饒舌漢が續々殖えて來やアがツたぞ。オヤ死屍が方纒言を吐くやうに至ツたせ。死屍たア如何いふ事由だ。ナニ土次公が眩倒して困ツたのサ。オヤ大驚よ驚愕た、サア一同で何か食へ。余が大金廿錢出すぞ。余も出す一同も早くまくとり出せ。此の字づ、の出金と費額が定ツたら出さふぢやねへか。サア。此で財本の出來たが使よ。誰が行くか。抽籤が



○明治八笑人の著あるを聞て

感ざる所あり

米露舎厄海

世の中を絲瓜の皮と悟りてい

ひたへよ筋のはりあひもぬけ

○八笑人のこゝろを

五面堂瑣末

今日いけふ明日い飛鳥の山櫻

うかれくゝて日ぐらしのさと

○ま、よさんど笠云々の意を

猿蓬莊九弄

さんど笠直に被らん進もなく

横ちやうまでもかり盡しけり

恰好籤を抽くと一よふ余一個の抽籤を免してくれん何故  
 だエ然れぢやア各個が脱るやうになつて來る故いけねへ  
 「雅太を免しやア余も免るよ余も同一」それ見ろ抽籤をする  
 者ア無くなつてしまふだらふぢやねへ「マテ」使よ從  
 てへ行かねへ事由もねへが先づ酒とくるだらふ「そらよ酒  
 の横坊の三河家とくるだらふ彼店の酒が最美だのう」それ  
 ぢアや何と言へれても謝絶だ何故そんなに横坊を忌るん  
 だエ願横坊に惡鬼が在るわけでもあるめ「惡鬼」在ねへ  
 が脱衣婆が在らア能樂九郎の籤をこしらへ「サア」一同  
 が抽たり「〇符の書て在る籤と抽いた者が何人でも使

に行くのだよ「諸々」サア雅太公早く抽かねへ「か」日常念ずる  
 不動明王の靈驗に依て籤に當りませんやうよ南無成田山  
 不動明王「何を愚言を就く」だエ早く抽きねエ「如何なる  
 ものか」〇符のある籤ア誰だ「」まめた余の「マア免れたが  
 と、オヤ」雅太公が當籤か此が搖會の籤だ「」たら踊躍ッ  
 て悦ぶだらふが、使の籤と來ておるも「」だから、泣顔をして  
 のやがる世「」世に暫措當籤者「」横坊の三河家へ行つて、純精  
 酒を三升と、午道の今廣で雞肉を八小碟と、一種の何物が好  
 からふね「」エ「」大口魚に鮫鱈青魚の烹たのに桃花片鍋泥鰌鍋  
 煮熟筍、乾煮豆、滓等數品でござい「」繩戸帳酒亭の報告者もよ

ろしくだア少間まづかにしねへか「一種ハ打生と決めちや如何だエ」打生も好からふ「余ハ烹煎魚肉だア各自ま嗜好を言ッこなしさ、然れぢやア打生と決めよふサア雅太公早く行て来ねへか「此使事に行くのハ、羅生門に向ふやうなもんだ」悪鬼の手腕でも携て回るがい、「然聞くと雅太公が綱氏に見ゆるから不思議だ」ちげへねへ、豚よそツくりだ「雅太公ハ酒店よ行くのを甚く困難よしてゐるが奴ハ未だ彼家の内に来てゐる女兒を見たをアあるめへ」彼の細君の姪女だとか妹女だとか云ツたが日々店頭よ座ッてゐるのう「彼の女か彼なら肖像が錦書舗に出るくらおだものヲ雅太

公たらふが痴愚公たらふが知らねへ奴があるもんか「また余を欺ぐのだらふ」欺がる、と思ツたら見たがらねへが宜「然かそれぢやア徐々出かけエ、と初の様子に相反へていそくとして出ゆき、がまてどもく回らざるばかりでなくあつらへやりし、酒殺さへ来らざるにぞ一同の待ちどほしく「雅太ハ如何したらふ、一同に欺がれた處から怒て何處か去て了やアまねへか」それにしても酒ハ来そうなるんだが然でもねへ、家でもまちげへてまごくしてゝもるやア、ねへか若らん、何にしても誰か行て見るとい、のう「この會議よやアうツかり言が發さらねへ」何で「此ア土

次公が行くべきだのう米露公「行くべき士次が行かざれば、行くに勝るの耻ありと、此是謂乎死すべき時に死せざれば、死よ勝る耻ありか、ひどい附會だのう、閑話休題士次公行て見てやツてくんねエな、情願だ鼻下公見てやらツと朴助が恰好「愚説いひねエ米露さんが家主之義務だで行て見るのが當然だア」然れぢやア復抽籤で行くと老よふ「賛成々々サア余が籤を造るから、一同が抽いッちまへ、と出せば各自抽き了り」誰だ〜抽籤が然らしいせと云ひる、まゝに訥平の手に在る籤を開き見て「オヤ困却だなア、自家で造た籤ヲ自家で取り當る奴があるもんか、此ア驚いた、トこぼし

ながら、方纒起て出ゆきしが、幾もなく回りて「困難な事が起がりこんだぞ、余の行て雅太公を携て来る故下物の誰でもさう命て来い、酒だけ今送て来るはづだ」何か争闘でもしたのか「何争闘ぢやアぬへ携て来れア分る故寸間行て来ると言ッ放して出かけしが復たら回て「余の来ない以前ア吃まずに待て在る」圖圖吃でしまふぞ」オヤ酷い奴だ、トくだらぬ言を吐きちらし、再び前の處に到れば、街上の人の山を成し、誹るもあれバ嗤ふもあり、訥平の群集の人を排し開け、近より見れば「一個の媽々の雅太吉が袖を緊々扯住一老婦の物をかりにげして、討帳されても還さない」とア、足下も願是蛙

面水だよ、ほんとうなら老者が斯ういふ生計をしてゐれば  
 時にア拂葉墳の賽銭にしろと云て、貼銭の一銭若二銭の収  
 らないよ云のが當然だ、他の客の時々十銭くれたり二十銭  
 くれたりするのに、妾が纏麻銭を財本にして、まいれておく  
 鹹味せん餅を、十二銭除買て、今銭子を携て来ると云たのハ  
 一ヶ月有半も以前の事だトならべたてられ、雅太吉の世間  
 の視聽面目なく分疎せんよも敵手の年來、蟬媽々ゆる手帕  
 を左傍の腰に挟み、腰刀の柄だよトいふ態状を爲し、又井の  
 方を指點して行く状を爲し、指にて銭子の形を作り、指一本  
 伸し、懐を指し、手を振り、自宅の方へ向て行く状をし、又銭子

の形を指にてこしらへ、懐中に入れて、此方へ向き馳る状を  
 作し、手を懐に入れ、銭子を取り出して、交付す状を作し、今ハ使  
 よ来たので、銭子を一文も携て来ない故、自宅へ去て、銭子を  
 取て来て還付す、トいふ手様を示せば、媽々の却れこり出し  
 一「なんだと、妾を刀で刺して井水へ投んで、賣得の銭子を奪て  
 逃るウ、人を愚視れしなさるなよ、今こそ鹹味せん餅店の老  
 婦だ故、衆客よ蔑視さるゝが、魚市に在たときやア、家政君家  
 政君と呼ばれて、典物の驅口をしたり、朝々暮々水桶を提て  
 水を汲たりした事アねへ、只管已が言ふ事のみ、饒舌するを  
 過刻より暗處に潜で觀て在たりし、訥平も今ハ堪ず進み來

り雅太吉の背後より聲をかけた。雅太公如何いふもんだ。エ、行  
 人たちがするだらふぢやアねへか。此嬢々に幾何負債が有  
 るンだ。エ、ナ、二十二錢還付せば完了のサ。今の財囊を提て來  
 ねへ。故自家へ行て取て來て還付すと云ても彼が驛子と爲  
 てゐるもンだから誤算をしてくだらねへのを纏陳らるゝ  
 よやア。避易だ。十二錢で完了なら余が假さふから還付して  
 快々回ンなせへト。賤囊より二錢銅貨六個を出して。嬢々よ  
 還付させ。足下が驛口よ出て回らねへもんだ。故、余が驛口よ  
 來なくちやならねへやうな事に至て而して十二錢放債さ  
 せられて、つまらねへ。余如何しよふと思た實は盤子め人困

らせやがった。せ、彼ぢやア實に貧兒め人を困らせやがった  
 と言てるだらふ。此時米露藏が家よての後よ留りし六人に  
 て。訥平、雅太吉の在らぬを僥倖にして、あつらへやりたる酒  
 殺を隨意よ吃盡し皆酔ひ倒れて高鼻駟兩個の回りてこの  
 体を見るより落膽してこの状ぢやア酒も殺も咸盡られた  
 らしい。せのう訥公、それは誰の所爲でもねへ。足下があんあ  
 嬢的よ扯住まるやうな事故があるもんだ。故、余にまで十二  
 錢代償さして而して二十錢の釀錢も徒費にさしてまよや  
 がった。ンだ。その代よ何か吃はしッちまへ。余だッてもあん  
 あ嬢々に扯ッて迷惑して在た處だ。其を黙ッく觀て在る奴

があるものか、「オヤかじよろいたあア、トいひつ、内よ入り  
 一同を喚起し「酷い奴輩だ余が雅太びしをひきとりに行つた  
 不在を好期にして酒も徹も悉皆吃盡して了やがッて大驚  
 愕よ驚愕いたサア其代よ各八十錢まくじり出して根津へ  
 行ッちまへ、ト言はれて一同可否をも言はず登樓と聞ちや  
 アのがせねへ、何はともあれ出のけようト直に衆議一決し  
 これより各自その準備を爲しけり

明治八笑人第一編卷之下

竹の家主人垂洩子戯著

古人も同氣相もとめ同臭相集ると曰へりける實は滑稽者  
 流ハ滑稽人を友とするものよや、茲に米露七等の數個人ハ  
 夫の訥平の奨誘もあり且は過刻の吃酒よ醉氣の出たる際  
 といひ、生來は所好なり、ぎよいは恰好一も二もなく同憶爲  
 し、うちつれだちて出けるが大街路に到れば午道に乘客ま  
 ちをすする車夫等は此一行の而をわからめ脚根の所踐の跟  
 踏を瞥一瞥身邊へ接近貴客ごつがふまで如何さま、合乗車  
 を四輛命して下さい、れやすくまひりませふ、一奴輩の適意な



處へ行くが宜余輩に質議するにやア及ばぬへ「貴客其様な  
 戯譚を罷ッしやらすよ駕して下さいな」然ほど依頼なら乗  
 てやるまいもんでもねへが元來那處へ往かふと言ふンだ  
 エ何處でも貴客等のお到なさる處までまひりませす「亞米利  
 加の國へ渡る意だが米國まで行くかエ、へエ亞米利加でも  
 佛蘭西でも隨行さへさして下されやア何處へでもまひり  
 ます」ふらんすは禁句だ「遠方だと聞いて在ましたが近國で  
 ございますとエ」ナニサ禁句だと云ふの「ア諱み語の義よ」ぢ  
 きそこでございますとエ、「ト同業者に向ひ、臺屋の飯器だと  
 よ、どうせ乗るやうな人物ぢやアねへト騒ぎながら後よ回

るを聞ては却々黙ッて止す「車夫待て〜何だと腕車よ乗  
 るやうな人物ぢやねへと、何をぬかしやがるンだエ」乗らぬ  
 へから乗らぬへと云ッたのが過言か「乗らふと乗るめへと  
 余輩の適意だア汝等ア強請しあがッて巡查に交付されね  
 へのはありがてへと思ッて在あがれ僥夫め「焉休々々彼様  
 な者にからかふと私黨の威が下らア」サア順次よ行進すべ  
 した眞個につまらねへやア「ナニ彼奴輩ア我黨の郷貫区内  
 に在ながら收是倨傲をしあがる故懲治の爲よ打てやるが  
 宜」どうせ牛馬一般の賤業をする奴等だものを敵手にする  
 にも足りぬへのサ「否然でねへ車夫輩に蔑視されちやア余

はほろが立つ多々人をばねよしあがるぢやアねへかナニ  
 彼奴輩はかトの取やうでどうでもなる「なんだつまらねへ、  
 怒ッて見ふり、志やれて見たり、わけが解らねへ「根津まで歩  
 く念慮か頭公如何するエ「ねずよ歩いたら勞れよふ「諸誰を  
 こぢやアねへ、既日が暮らア諸子如何する「脚のねへ國から  
 でも來たやうよ歩くのを苦にするなエ余ア歩く方が功德  
 に爲るから歩くことよふよ「拘摸兒に施興をする故か「嗟噫  
 はなせねへ男だ腕車に乗てガラ〜と經ッちやア顔が能  
 く見えねへからよ「朴的の顔なら見せねへ方がよッやど功  
 徳に爲りさうだ「否々然でねへ此男の顔を見た日にア何様

な辭結症でも思はず噴笑す故自然と疾病も癒る理で幾分  
 か救命の効験があるだらふよ「悉皆はなせねへなア十分途  
 上で痛めておけ、彼の廓よ行きやア到底余一個が可愛がら  
 れるンだから、此も婦女子に戀着かる、業報だと思やア怒  
 氣も起てねへ、「その顔色で怒氣でも起ッたらなほ見られぬ  
 へ「余は腹が空虚だ此近傍で何か食ふぞ一同つきあへ「余も  
 飯を食ふ雞肉が嗜ぞ、「じやも〜飯のねへ鳥から渡ッた冥  
 鬼の様で他聞が見ッともよくねへから街頭を歩さながら  
 飯の事は廢さうぢやアねへか、「此店へ入らふぢやアねへか、  
 一よからふ〜「余は牛肉が好「そら初まつた各自よ好きな事

を言ッた日よア決議が着かねへぞ余は何でも食ひせへす  
 りやア好サア〜此店と定めべしだ、ト此より一同銀座坊  
 の鶏肉店に登り飲ひもあり食ふもありて早既十分よ酔も  
 まはり次て飲も食ひ了り點燈時分も過ぎ錢子を償ッて起  
 ち出て踏々跟々しながら大音に「ナン トン シヤンチ、テン  
 トン シヤンか、志のぶこひぢひ、さてはかなさよ、こんどあふ  
 のがチン〜いのちがけ」ふりや〜街頭を歩きながら大  
 聲を發するちふは何したもんぢや、見うくるよだいぶん  
 酩酊の様子ぢやが縦へ酔ふちをる故ち申してむ、政令う忘れ  
 ぢやア相すまんぞト咎められても訥平は眞の巡查でない

とれもへパイヨ鼻下長三尺棒の假聲のよッ不ぞ巧へが余  
 の朴ねんじんのやうに假聲ぐれへぢやア驚かねへぞト猶  
 も潤たる聲を振りたて「どがもの」とれもへバかるさかしの  
 棒政府の威勢を笠よ着て「オイ止せち申すよ何した者ぢや  
 「鼻下的い、かげんよしろよ、人つけ巡查ぐれへ可怖ッて東  
 京の住居ができるものかエ、べらぶらう東京の輦轂之下だい、  
 泥鰯社會の不待論大臣參議の諸公でも腕車夫でも擔糞漢  
 でも肩摩殺之繁繁昌は金のなる木の栽培所だチリチツツ  
 ンチツツン〜みまはりゆけバトいよく興入り  
 たる休よて傍若無人の舉動なり同伴の諸人はさきのほど

よりこの休を知りたれども元來事に順着のなき性質よて加之各自にろれつさへまはりかねたる泥酔漢但をかしさ  
と氣のどくさよ離れて人家の簷下を悄悄として歩きなが  
ら指し爲して竊笑ふのみ、かくて訥平は頗醜酩酊せしものと  
見え早既街道へ打ッ倒れてまはらぬ舌の根休めもやらず  
解らぬとをどなるにど巡こやく街頭に寐るちゆふがある  
もんか、且過刻よい敷回申し聞かするに、街路よぢ大聲を發  
しては相すむ理でないを兎に角警察署に來れ何たと警察  
へ來いとフンそんな假聲ぢやア動かぬへぞ足下等諸人は  
先へ行て眞正の巡查をよこせ然したら屯所へ行て巡查と

一討論つかまつらふ萬が一負けたところが謝れアすまア、  
オイ水を飲ませる、然々往來、成田屋が酒井左衛門を扮した時  
太鼓の胸で大酩酊で水を飲んで、酒醒時の水甘露々々と言  
つたが「よひぎめの水の甘さ」下戸知らずで酔つた後の水  
の味ハ又特別だのウ姐公何を申すか上戸本心違へずとか  
申すに斯様よ前後を忘却いたすと申すがあツかこれサイ  
僕と興共よ來れち申すにト兩手を把て引き起され思はず  
顔を見て驚愕さて鼻下造とおもひのほか、眞の巡查なれば  
這ア大へんと思へども逃げ出さふも脚ハ利かず今更謝  
罪を言ひ難ければ獨自意中に思接するやらやッぱり酔た



○酒客のこゝろをよみてとの  
 需よ應トて

正覺坊酒仙

酔ざめの水の甘さも何のその  
 悉ひたる心地下戸ハ知るまじ

○おなじ心を

同

酒のまぬ人の心や如何ならん

酔愛を掃ふのは、きめもなし

○酒の徳を稱するとて

同

酒ちくば月雪花もなんのその

たのしといもふ人やあるべき

体ていに摸も出でし此こ場ばを巧たくく遁ぬれんと此こハ巡まはり査し公こう取とれそれいりま  
 した、ヘイ一いつ碗わん吃ち酒しゆしましたので何い時つか倒たふれて了しましたか  
 ヤッぱり家うち裏らに寐ねて在ある意いでございしました「巡まはり」リヤア酒しゆも  
 飲のんぢよるぢやらふふが、街まち路ぢ上かみよ寐ねたり大たい聲せいを發はする等らは、  
 甚はなはだ暴あつ行がぢやア無あいか、今こん晚ばんなア酔よて前まへ後ごむ知しらんちいぞ、  
 放はな免るしちエむ遣やらふが、向まう後ご嘶しいふ事ことがあるぞ放はな免るされん  
 故から然さ心こ得とるが宜いト是これより手て簿ぼを出だして住あつ處ところ宅ち番ばん号ごう姓せい名な  
 職しよく業ぎやう年ねん齡れい等とうまで詳くわ細じゆ記き録ろくされさて玻か璃り燈とう器きを携たづへつ、此  
 場ばを去さりて巡まはり行かうさる、に過さ刻こくより物もの蔭かげにて落お着ち如い何かと見  
 て在ありし七しち個こは走はり出い納せ公こう如い何かした平へい分ぶん出し金きんだといも

ッて多あ々ま吃ちひ食しるもンだから見みる、吃ちひ酔よて街まち頭あたまに寐ねるや  
 ら濁な聲こゑでとなるやら、終とう是こゝ巡まはり査しの保たも護ごだ、「屯ちん所じよへ抱だ留りゆうられあ  
 がッたら向まう後ごの懲ちやう戒かいよ爲なるだらふに「ヤッぱり今け日ふの晝ひる間ま  
 余あが朴ぼく的てきを欺かいだ轍せだと思おもやがッて鼻はな下か長ちやうその手てぢやア  
 欺た問まされねへッて言いやアがッたからたかしくて堪たえられ  
 ちかッたせ「然されぢやア足あ下か等とうは知しッてながら黙だまッて見みて  
 やがッたのか、浮う薄はくな奴やつ輩らだあ、「巡まはり」査しに引ひきまじり起おされて  
 顔かほを見みた時ときの訥だつが顔かほ面めんッていふのはなかつたせ「陰かげ」でばか  
 り幾いくら強つよい事ことを吉いッてもサテ如あ彼かなるぞ意い氣き地ぢやアねへ  
 の「余あ」よ對たいふと大おほに強つよいせ「そりやア其そのはづよ」なせ「一ひと足あし

下へ押へた雅多だものを「それで詣詣か見ッともねへ休焉  
 休焉「訥公が眞に警察署へ拘引されたら何様だらふ」それこ  
 そ菊菊の啞子で結局が着くめへ「戦慄恐懼で言が吐けねへ  
 と云ふのか」警察署なんぞの平茶未だ余と如斯處へ出ても  
 分疏が惘然したもんだからささが何時でもへこみの体だ  
 がそこへ至ちやア足下等の判然なもんだらふ凡味の今日  
 よ生れても學問が讀めねへから、惘然と判然とまぢげへた  
 り、凡味のを分米と言ッたりイヤハヤはなせねへ人物だ  
 ど頑八もなまもの識の大天狗にて和漢語混雜の口を聞く  
 時に誤濕多き者なれど判然の差別ぐらゐの心得あら在る

故聞き咎め訥公足下の言ふ事がよッ不を誤ッておらア試  
 問判然たア何の事で惘然たア如何いふ義だエ「判然ハ可愛  
 さうと云ふ義で惘然ハ事のよくわかる義ぐれへ知らねへ  
 奴があるもんか汝が僅々學問を知ておると云ッて小笠原  
 嶋の學校の教師かあんなどの様に唯我獨識と思ッて在ると  
 大謬見だア「アハ、ハ、ハ、ウフ、ハ、ハ、エハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、  
 オ、苦しいヒ、ハ、ハ、訥公がアハ、ハ、ハ、まぢめくさッてよ  
 オホ、ハ、ハ、彼様ハ事をウフ、ハ、ハ、言ふからあかしハッて  
 堪えられねへテハ、ハ、ハ、ウフ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、何だ此奴等  
 アあかしくもねへ事に笑やがッて鼻下さん訥公ハ學識家

だねエ、エへ、ムフ、ムフ、一憫然と判然と誤るやうぢやはあせねへあア足下を知てゐるのか「雅太坊が亦あまいきに知れた休をしても知らねへから可笑一學識者流がそろつてゐるから議論の結局が着かねへ」どうせ頑八の議長だものを却々議決に至る事ぢやねへやあ「議決候らひを待つよりまかたがね」一時節の到来するのを待てゐたらそろく、夜が明けよふ「然したら曉鴉が呆子呆子と啼きさうだせ」なんだつまらねへ喧囂奴輩だ「オイ、諸子が攪乱すと訥公との問答が消滅よあるから少時黙つて在さつしエ、訥公凡味開化したア如何いふ錢だエ、彼か彼れハ斯ういふ義だ凡ハ

凡人の凡で味ハ愚味の味ハ片人の愚味な者まで開ける時運だから凡味開化さ然を人皆懲つてゐるもんだから天朝から扶助米でも給へる様よ思つて分米々々と云ふのハ大謬謬だと云ふのよ解つたか「なるほと鼻下長も朴的も訥公が牽強附會の説を聞いたか「オイ、頑八もよつ不忠誤つた事を言ふせ「余の言ふ事が何で誤つてゐるよ」今足下何ちつたエ「縣廳府會の決と云つたぢやアねへか「マ宜く考へて見ねエ「府廳で會議をするから府會だらふ縣廳の會議なら縣會ぢやアねへか、然に縣廳で府會の決を取るなんぞハ足下の云ふ寸法ぢやアなからふ「ちげへねへ、恐れ入ッ



たもんだ、まかし余輩の社會で牽強附會と云ふあゝむりこ  
 じつ○の事よ、時に饒舌をしながら歩いてゐる内に早既  
 町まで来たせ、今夜の誰が擯斥れて誰が厚待するだらふ誰が  
 被厚待と訊問がもなアあるめへ、婦女子にかけちやア恐く  
 此雅太坊ぐれへ可愛がらるゝ者ない子、何樓へ登ても、初  
 會がれして、としやはづかしいって位なもんだ、其他にやア  
 一個も被厚待といふ顔色に見えねへな「フン余の復泣て喰  
 ひ着かれるのが今から愛苦でならねへ「洋犬でも抱いて寐  
 るのか「各自よ好男子ぶッても婦人よ被厚待巻軸の何時で  
 も此鼻下造だから實にわきのどくさねエ、「乞巧演戲の座長

の新富座に出ると馬脚よしか使へぬへのと同一殿で茲に  
 成田屋といふ大俳優が在るから、餘の馬脚や捕丁の先づか  
 めひだ、よ「彙日吉原よ行た時も各自に好男子ぶッて、キビ  
 く擯斥れた中で憎いとか可愛とか云へれたの、余が一  
 個よ今夜も亦彼の轍で行ゐなけりやア好が諸君の妒忌が  
 こわらし、い如斯聞けば一同被厚待念慮のやうだから斯し  
 よふぢやアねへか、此中で擯斥れた者の科料に明早の朝食  
 をおごるとしちやア如何だ「擯斥れた上に朝食をおごッて  
 おたまりこぶしがあるものか「然ぢやア雅太公の擯斥れる  
 のが今から知れてゝもゐるのか「饗食を聞て多々愛にする

せ「愚を言へ擯斥れておこる約束だと足下等が最是かあ  
 そうな人よなるのだから庇保ッてやるのをありがてへと  
 もおもひねへのか被厚待被厚待と云ふ奴に限ッて被厚待  
 例がねへノウツ米露公一言いねへ足下もあんまり被厚待との  
 ねへ男子だぞ」そねめくア、好男子よやア爲りたくねへ、  
 「希望どほりに好男子でねへと来ておるから、こす所いあ  
 るめへ問話休題擯斥れた者が朝餐をおおる一件い如何だ、  
 此一行にやア擯斥れそりな顔色も見えねへから、一同不同  
 意いなさそりなもんだがト煽りたてられ各自に一も二も  
 なく同意なせしが、雅太吉又も進み出「そりやア好が誰も明

朝に至て、余が擯斥れたと自白ッて出る奴いなさそりだが  
 頑八兄足下如何して擯斥れた擯斥れねへの判決の着け様  
 がねへぢをねへか「それくその判決が着かなかつた日よ  
 やアおこらせやうがねへから、今夜の小妓樓に登ッて一室  
 別衾にしてもらひふ、然すれば交互に検査をしあふから此  
 が最是明白だ、而して何でも明朝起る時に敵妓の来て在ね  
 へ者がねと定めよふ「よろしい、誰がねとるか、ねとる奴  
 の顔色が見てへもんだ此時既根津の廓に到るゝどに彼樓  
 か此樓かと素見し歩き遂に一小妓樓に登りこみしが、ひき  
 つげもすみて後サアねのづらへ何にせふ彼に志よふの

評議もながく、ヤツト評議一決して酒と殺をいひつけて、つらへ物の出たる後も殺一箸酒一杯その敵妓に献すもな  
 ければ、吃へといふもなきのみか、孰れも例の口わるなれば  
 各自に敵妓の顔色の品評より肥った体の豚のやうだの、瘦  
 せた所が、乞丐馬車の馬のやうだの、ヤレ身幹が短いから床  
 下の掃除をするに恰好、ヤレ立行より横に轉がる方が速そ  
 うだ、外國人に見せたら高價なならふ、生活人物の妖怪だか  
 ら、イヤ然でぬへ此の丹波の笹山で生獲った猛熊を松本喜  
 三郎の手よかけて頭部耳如生人形で製へたのだ、その証據  
 にヤア手足の爪をこわらしいほを長してぬるぢやアねへ

か等と種々侮辱之言を吐きあがら、酒碗と箸の下へも措り  
 き飲むと吃ふとの兩天秤、すゑの互は酒碗を相奪ひ、箸を争  
 ふ殺風景の、上野の山は飼ひ馴す彼のひぐまの食を争ふよ  
 髻髻たり、斯くて既よ酒席も撤去と至り、各個臥褥よ入りた  
 れども敵妓の厠房に起ちたるまゝ、待てどもく、回來れば  
 ころ、早既二時過ぎてバグくと打つれだちて入り來りし  
 が豫て相約したるを、見えて幾もあく孰れも起き出て復  
 バタくと出て行きたる後、酔た餘に睡一睡したか、とれも  
 へバモシくと揺り起され眼を開いて各自よ己の臥衾人  
 の臥衾をも注視すよ、敵妓の孰れも其枕と共に見えざるに

ぞ「優劣あうりつ」なく見みてと奇麗きれいに擯はられたらし「せらーい」トハ疑うたが  
 ひの語ことばだ此こゝぢやアらしい所ところハねへ真個まことに擯はられたんだ「う  
 らみッ」こゝがあくッて好い一いか「昨夜ゆうべの殺風景ころもぢやアもて  
 やう理由りゆうがねへ、どくづき様さまハ酷ひどいものものを「愚痴おこ」をこぼしッ  
 こゝしにしよふ「他見ほかみ」が悪いわる早く回かへらふぢやアねへ「か」サア  
 く「行い」かふく「ト」一同いっしょ起おきて悄悄せせと鹽しほ嗽せきもつかひを駈かけ出だ  
 すよ士次しじのみ數步かずしほ晚おそれたりしが方纒かたく追おひ着つき一息いそつき「頑がん  
 八さん如斯かなりやア朝餐あさめしやア平等へいとう出費しゅつひだらふなア

明治八笑人初編 畢

明治十六年六月廿五日出版御届 (定價十二錢)

編輯人 東京府平民 九 岐 晰

出版人 廣嶋縣平民 桑原八郎次

東京京橋區加賀町十二番地

發兌元 由己社

○東京大賣捌所  
 ○神田雞子町巖々堂  
 ○平松町大津屋善兵衛  
 ○琴平町靜霞堂  
 ○元大坂町法木徳兵衛  
 ○本町二丁目小宮山昇平  
 ○室町三丁目秋山武右衛門  
 ○麴町五丁目藤崎定雄  
 ○馬喰町三丁目上茂兵衛  
 ○本郷春木町解明堂  
 ○牛込藤加字  
 ○大傳馬町二丁目三宅半四郎  
 ○長谷川町福通二丁目深瀬龜次郎  
 ○通四丁目内藤加字  
 ○四ッ谷傳馬町加藤久兵衛  
 ○銀座二丁目熊次郎  
 ○米沼町深川屋長助  
 ○牛込神樂町積善舎  
 ○四ッ谷傳馬町加藤久兵衛  
 ○銀座二丁目開新社  
 ○小川町秩山堂  
 ○木挽町一丁目萬壽堂  
 ○諸國大賣捌所  
 ○尾州名古屋石版舎  
 ○仙臺大町四丁目木村文助  
 ○廣嶋大手○筑前博多中順藤井孫次郎  
 ○早速利陸奥國青森大町丹心堂  
 ○三重縣津京口町小林鉦三郎  
 ○青森縣津輕町正友堂  
 ○三州豊橋高須又八  
 ○横濱ステーション鈴木陌三郎  
 ○横濱太田町平野傳吉

本社出版書目

○智慧の庫	每月發兌定價二錢五厘 一ヶ月前金二十六錢	○東京娘風俗	同十五錢宛
○人間百事問答	每月發兌定價八錢一ヶ 年前金郵稅共八十八錢	○商法融通論	同十錢
○智慧の庫合本	自壹册至八十號全八册 壹册=付定價廿五錢宛	○男女交合得失問答	同八錢
○智慧の庫附錄合本	定價廿五錢	○北里花魁列傳	同二十錢宛
○智慧の庫虫干	同十五錢宛	○西洋天一坊第一二	同十六錢宛
○古今詩文軌範合本	同三十錢	○撰枕草紙	同二十五錢
○夫婦廢物語	同七十錢	○奇聞烈女の疑獄	同二十錢
○東京政談合本	同七十錢	○通水滯後傳	同廿錢
○女房の不經濟	同十五錢	○楠公旗章寫真石版	唐紙 同廿錢 半折
○危世者色與酒	同十八錢	○幾何本原合本	同一圓五錢
○小學諸禮手ほどき	同十錢	○思ひ浮世の間違	同十錢
○女子のなる木	同九錢	○きや卵兩國橋奇聞	同十錢
○子育の草紙	同十五錢	○とやげ	同六錢宛
○郵便規則改正	同六錢	○男女衛生新説	同六錢宛
○郵便條例一覽	同六錢	○三代目膝栗毛	同六錢宛

欠

MISSING

091885-000-9

特67-720

明治八笑人 第1編

垂洩子/著

M16

DBO-0418

